



ゲルマニ
ウム人

川崎ゆきお

訪問好きの木下が万屋錦之助とあだ名されている男の家へ行った。

名前の通り、万屋、萬屋をやっているわけではない。今で言えばコンビニだ。

何でも屋で、何でもする男だが、一つとしてもものになった試しはない。

百万遍という土地は学生が多い。京大があるためだろう。昔のような下宿屋は確認しにくいだが、靴を脱いで上がらないといけないようなアパートはまだ残っている。

錦之助は居残り組で、卒業すれば、国へ帰ったり、引っ越す。

錦之助は、その居残り組の残党だ。働かないで、まだ学生気分である。しかし、もう結構な年だ。それまでどうやって生活をしていたのかは謎だが、自営をしたり、バイトへ行ったり、誰かの手伝いなどをやっていたらしい。そのあたりの経歴は友人である木下にもあまり明かしていない。

「京都は久しぶりかね、木下君」

「万屋さんもお元気そうで」

「何？」

「あ、観光で来たもので、寄ったまでです」

二人はSNSで、それなりの消息は分かっているのだが、リアルのことはさすがにネットでは語らないため、今どんな状態なのかは知らない。

万屋錦之助のネットでの友人一覧を見ると、錚々たる面々が並んでいる。これを腑分けすれば彼だけが何の肩書きもない凡人に見える。アヒルの集団に白鳥が混ざっているのではなく、白鳥の集団にアヒルが混ざっているのだ。

木下が興味を持ったのは、そこだ。それで、チャットなどでたまに話すうちに親しくなった。

どうして白鳥の集団にいるのかを聞いてみると、学生仲間だったようだ。

当時、万屋錦之助はそこでの若大将だった。

「みんな出世したきにね」

西日本の方言をそのまま使っている。

「でも京大出でも駄目な人はいくらでもいるでしょ」

「ああ、僕がその代表だわ」

「学生運動、やってませんでした？」

「そこまで年寄りじゃないきに」

「そうですか」

「今、ゲルマニウムラジオを組み立てているんだが、いるか」

「ああ」

「これは売れますぞ」

「ああ、はい」

「少し大きくなったので、小さくするよう工夫しているところなんね。しかしねえ」

「あ、はい」

「これ、以前もやっていたのを忘れていたんだわ。まあ玩具だ。また同じことをやっている。いろいろやりすぎて忘れてしまったんよ。鉱石ラジオはまだ作ったことがないから、そちらでも

よかったんだがけど」

「はい」

「だから、今回は組立キットとして売り出そうと思っちょる」

「あああ、はいはい。万屋さんは工学部だったのですか」

「いや、文学部で哲学だ」

「ああ、西田幾太郎。哲学の道ですね」

「銀閣寺はいいねえ。金閣寺より」

「あ、はい」

「あの近くに子分が大勢いたんだけどなあ」

「アパートが多い場所ですね」

「そうだ。生き残ったのは、僕だけかな」

「あ、はい」

「さて、誰を紹介して欲しいの。それで来たんでしょ」

「あ、いえ、違います」

「今のうちだよ。僕の友人も、そろそろ現役から退く時期だからね」

「いや、純粹に万屋さんに会いたくて」

「そうなの。何も土産、なくてもよかかね？」

「よかですたい」

「何処の言葉だ」

「あ、どうも」

「まあ、このゲルマニウムラジオを持って帰りなさい」

「あ、はい」

「もう飽きた。次へ進む。キットとして、ラジオにもなれば無線機にもなるやつを作る。十以上の機能を持たせてね」

「基盤を買えば」

「駄目だよ。あれじゃ学べない」

「そうなんですか。でもお友達にロボットの研究家でしたが」

「バカだよ、あいつは。鉄腕アトムを作ろうとしているんだから」

「あ、はい」

「その前に人工知能を先にやるべきだが、人はデーターだけで動かんきに」

「そのあたりが哲学の片鱗ですか」

「そんなこと誰でも分かってることじゃないか」

「ああ、はい」

木下はかなわないと思い、ゲルマニウムラジオをポケットに突っ込み、靴下で滑りそうになりながら、アパートの廊下や階段を滑り抜けた。

まだ、あんな化け物がいるのかと思うと、楽しかったようだ。

了